

○第1部 記念講演

講師 株式会社長銀総合研究所理事長 竹内 宏 先生

「これからの日本経済と土地問題」

竹内でございます。大変高いところから、しかも座ったままで恐縮でございますけれども、昨今の経済と、これからの経済と土地の関係についてご報告申し上げたいと思います。

河野理事長がただいまご挨拶されましたけれども、皆さん方、専門家の前でございますので、大変緊張しているわけでありまして。結論から言いますと、答えがわからないという結論ではなはだ恐縮ですけれども、今後の経済とかを考えましても、当たったためしがございません。アメリカで真面目な研究ですけれども、為替や金利についてエコノミストと占師とでどちらが当たったんだということで、答えはいずれも当たらなかったという答えであります。どこが違うんだといったら、エコノミストだけ、間違った時も反省しないで、間違った理屈をくどくど言うところが違うんだそうでございますけれども、そんな意味でお聞き逃し願いたいと思うわけでありまして。

〔日本経済の現状〕

まず、経済の現状ですけれども、大変緩やかな回復になっておりまして、4-6月は消費税の反動があり、特に4月は、自動車など売上前年同月比が20%近く落ち、百貨店も15%ぐらい落ちましたけれども、2ヵ月、3ヵ月経ってきますと、だんだん元に戻ってきて、まあまあ水準になってきたのかなど。今年の夏は寒いと言われましたけれども、結構暑くなってきております。きょうなんかは自動車がずいぶん混雑しておりますので、瞬間をとってみますと、3%近い成長になってきていると思われまして。

その最大の理由は製造業が強くなったことです。荒っぽく言えば、リストラに成功し、国際的規模のアウトソーシングに成功したと言えます。生産拠点も海外に移し、そこから安い部品や原材料を輸入したり、あるいは組み立てて、それを国内で売ったり、海外で輸出したりし、日本の国内では極めてレベルの高いものをお作りになったということでもあります。海外に工場を移転すれば、そこで使われる自動機械を輸出し、高級部品を輸出し、日本の産業構造が極めて一段と高くなり、そして、国際的規模で最適配分といいますか、安いところからいろんなものを買う、このようなことをうまくされたのです。

日本経済全体としてみれば、海外投資が進めば進むほど雇用機会が海外に漏洩するわけです。工事費なども海外に移るわけですから、それだけわが国の成長力は、賃金が安くて、土地が安い海外に移転したという



ことです。

その面ではおおいにマイナスですけれども、企業からしてみますと、安い原材料が入り、製品の組み立てが安くなり、全体として利益が出るようになり、利益水準はバブル経済の前に戻りました。収益が上がるとともに、置き換え投資、平成不況の時に長く抑えてきた自動化、国内設備の高級化投資が盛り上がってきますし、それから、携帯電話機の投資ブームが終わりましたが、次には、いよいよデジタル通信、あるいはマルチメディアの幅広い投資がございまして、その投資を引くくめまして、設備投資は7%ぐらい上がっているのかなと見られます。

ですから、やや円高になってきましたけれども、それに伴う輸出の減退とか、伸びの減少であるとか、あるいは公共事業が減ってまいりますけれども、その減った分ぐらいはカバーしそうだというふうに思われます。製造業を中心にして雇用も幾分拡大し、それに伴って消費も幾分伸びてきたと見ております。

大都市では、地価も底値をすでに割って、値上がり傾向に入ってきたようであります。日本経済全体としては、製造業によって回復してきたと言えます。

〔家計行動の変化〕

われわれの生活もごく普通になってまいりました。バブルの時にいろいろなものを買いましたけれども、特に若い女性の方が一番消費動向が激しく変化するわけであります。ちょうどバブルのころは、高いサンローランの何とかとか、グッチの何とかとか、30万とか50万するものが買われましたけれども、バブルの崩壊とともにガックリ落ちて、二、三千円の激安品が買われましたけれども、現在は大体5万円ぐらいのブランド品が買われる。靴とか、ハンドバックとか、衣類とか、そんなものでありますけれども、大体東京で5万2,000円ぐらいが平均かと思われまして。私のふるさとの静岡でいきますと4万8,000円ぐらいでまあまあかなと。それを1年に3個ぐらいお買いになるということから、20歳代の方ですと金利が低くても預金を持っておりませんから響きませんし、地価が下がって、金利が下がっておりますから、住宅費が下がって、生活費が楽になっております。30歳代ぐらいになりますと、両親が私ぐらいの年配で、両親は余裕がありますから、孫にいろいろなものを買ってやっているという感じであります。ですから、年間15万円から20万円ぐらいのブランド商品を買える余裕があるというようなことでもあります。

私も平均的な人間ですので、行動も非常に平均的であります。私の行動を振り返ってみても、バブルの前にはマークIIを持っておりました。バブルになると、自宅の評価額は上がり、すっかり資産家の気持ちになってクラウンを買った。バブルが崩壊いたしますと、地価が下がり、非常に貧乏な感じがしてまいります。その結果、クラウンを9年乗ったわけです。今度は消費税が上がるというので、3月20日ぐらいにマークIIに乗り換えて、元に戻った。これで至極平穏といいますか、一時の浮ついた気持ちから、平穏な生活をしているのかなと、こんなことでもあります。

【今後の課題・高齢化】

日本経済も、狂った時代からごく普通の時代に戻って、現在、狂った時の幾つかの産業の問題が残っている。最大の問題は役所産業が非常にピンチであります。それから不動産業、それに伴って金融業、農業、これがマクロ経済の重荷になっておりますけれども、実体経済は幾分強くなってきた。緩やかな回復といったのは、そんなことかなというふうに思われます。その結果、地価が底値になったと思われます。平均的な収益率が上がってまいりますと、地価が安くなれば、当然いい土地は採算に合うようになってくる、このように思われるわけであります。

ところが、そこから先を考えますと、幾つかの暗い問題が将来にあります。この暗い問題がありますから、いまいち力が出ないということであります。一番目の問題は間もなく確実に高齢化時代がやってくる。2025年ごろ、65歳以上の人口が25%になると思ったら、10年ぐらい前にやってくる。未曾有のスピードで高齢化時代がやってまいります。老人が多いというのは、私も老人でありますけれども、当然成長力が鈍ります。それから養うべき若年人口が減っております。それから死がストップされてしまいます。管をつけると止まってしまいますから死がストップできます。管をずっとつけたままでは抜くわけにはいきませんから、医療費も非常に負担が重くなってくる、こういうことであります。コミュニティが崩壊しておりますから、介護する人がいないので、介護労働のウエートが大変重くなってきて、若年労働力はその分にとられていく、こういうことであります。

幸か不幸か、医療が進歩しましたので、非常に長生きするようになりました。心臓をとりかえることも、臓器の移植もできるようになりました。ですけれども、心臓を移植しますと3,000万円かかりますので、これを健康保険でやったら保険がパンクしてしまいます。ですから、自己負担ということになりますと、余裕のある人は良いが、そうでない人にとっては悲惨な時代がやってくるわけでございます。

そのような非常に暗い時代が目の前にあり、すでに年金をカットされる。公共事業も今年7%ですけれども、2000年には15%減らすということですし、それから福祉も、政府の考え方は、年金のうちの報酬比例分は大分減らす。65歳から2年延ばせば67歳になりますけれども、たった2年ということですが、考えてみれば、平均寿命を80としますと、15年分払うところが2年分やめますから、15分の2です。つまり年金も多分30%ぐらいのカットを予想しているようですし、医療費も20円払っていけばよかったけれども、これが1回分500円とるぞとか、6回以上薬をとったら1日100円とるぞとか、そんなことで負担が重くなっております。

年金も破綻するかもしれない。その上に保険会社も破綻しておりますし、銀行も破綻しておりますから、保険掛けるには保険を掛けておかなければならないというような、何となく将来が暗い感じがするわけです。ですから、何となく消費も明るさが出ない。いまいち明るさが出ないというのはそんなところにあるように思われるわけであります。

ですから、これからを考えますと、この問題についてある程度めどをつけておかなければならないという点が非常に問題です。何かめどがつかなくても、めどがついたような感

じがしますと明るくなって頑張るわけですから、そのめどをつかせるということが非常に重要だと思われま

[今後の課題・行財政改革]

そこで政府もお考えになって、いろいろな改革をやられているわけでありま

それから、わが国が非常に重たくなりましたのは、民間もそうでありますけれども、政府も大変重くなりました。政府部門全体の負債は 500 兆円弱です。このうち赤字国債が 80 兆円ですから、いわば 80 兆円は飲んだり食ったりしてなくなっちゃった。そこで、負債があれば国民に借金しているわけですから、その金利を支払ったって、税金でとっていれば元の本阿彌で、問題がないはずだ、ただ、政府負債の 500 兆弱のものが代わりに資産になっているはずだということになります。

それでは、その資産は何かということですが、残念ながら、そのうちの 80 兆は飲んだり食ったりして、もうないのです。あと 400 兆残っておりますけれども、その 400 兆は可かという

これはお役所としては当然のことで、景気を振興するために道路を作る。東京なんか道各がまだかなり足りない。環状線を作れば、首都の真ん中の環状線は、外環状を作ればずいぶん減るわけです。環状 8 号線を完成させるだけでもいいわけですが、まだまだ解決しない。開通するには、予定地に 2,000 人の人が住んでおりますから、これを引っ越すだけでもあと 50 年かかるだろう。いままで 40 年かかって、100 年かかってできるかどうかわからない。その外環状を作ってはどうかということになりますけれども、こ

ですから、みちのく高速道路か知りませんが、そういうところに行ってみたら、自動車が 1 台もいなくて、「カモシカに注意」なんて書いてあるところが至るところにあるわけでありま

コントロールする日本の支配システムだ。その支配システムのコストとして、至るところに同じようなものができ上がっております。

最近になりますと、堂々たる劇場であるとか、音楽ホールができ上がっております。私のふるさとの浜松にも立派なホールができて、大ホールは、東洋一か、世界一のオペラで、舞台が五つもあるわけです。その横に小ホールがあつて、そこにはパイプオルガンがあるわけです。ところが、係の人がこの間間違えて栓をひねったら上から消火用の水が落ちてきて、パイプオルガンの中にたまってしまつて、それを取り出すだけで 3,000 万円かかったんだという話でありますから、とにかく、そのようなものに 400 兆のかなりのものがあるに違いない。つまり経済効率が極めて悪いということでもあります。

バブルの時もそうですけれども、いま金融機関に一説では 60 兆とか、実際何兆かわかりませんが、かなりの不良の資産がある。この不良資産は何だというと、土地を買うのに融資してしまつた。その先はといえば、バブル時には地上げ屋さんが無理やりに土地をお買いになつて、銀行が貸す先がないから、そこにファイナンスした。その時、誰が得したかというといえば、地上げ屋さんに土地を売つた人が大儲けして、買った方の地上げ屋さんが損をして、その 60 兆円は得をした地主の方々が土地成金になられて、クラウンやベンツなんかを買っちゃつた。こういうことでなくなつていく。その時、われわれがその需要によって消費が高度化、高級化した。ですから、高級品を作るに限る。流行も回転度が早いんだというようなことで過剰な設備が残り、それから過剰な消費が残り、私の例でいえば、買わなくてもいいクラウンを買つたというわけでもあります。それが不良資産として膨大な 60 兆円として残り、これが日本の金融システムを揺さぶつていく。

こういうわけですから、これを解決するためには仕方がないので、行財政改革であるとか、あるいは金融の再編成であるとか、そんなことが必要で、とにかく金融は危ない。ここでビッグバンだということで一挙に自由化される、こういう次第であります。多分それは不良資産の問題ではなくて、これからはわれわれは大変大きな資産を持つてしまつたということでもあります。

これは考えてみますと、土地の上ののつかったいろいろなものの負担は絶望的なほどの大きさであります。社会資本の大きさで現在残高が 700 兆強ですが、これはバブルのころとか、最近の 10 年間ぐらいに集中的に投入されて 700 兆になりましたから、その部分が 2010 年ぐらいになりますと、30 年から 40 年償却とか考えて、その償却が年間 40 兆円ぐらいのつかつてくることになります。ですから、新しい施設ができないで、その辺で下水工事をやり直しているとか、高速道路がボロボロになつてきて、トンカチやつて直すとか、あるいは橋をちょっと直すとか、そんなことでかなりの投資額を使うことになります。ちょうどいまのスギの林みたいなもので、過去スギを一生懸命育てたけれども、結局、メンテナンスの力がなくて、下枝がいっぱいになつた結果、下に木が生えなくて、大変不毛になつて、風が吹くと風倒木になつてしまうという有り様で、植えたままメンテナンスができなくなつてしまつたというわけです。多分 2020 年か、2010 年ぐらいになつたら、山の上まで通つている道路がメンテナンスできなくて、草がボウボウ生えてしまつていよう

なことさえ考えられるほど巨額な投資がごく最近行われ、ちょうど今ニューヨークがメンテナンスに困っているように、日本も間もなくあと十数年たったら、そのメンテナンスに困るだろう。例えば現在でもダムをたくさん作ったので、土砂が下流、そして海に流れなくなって、海岸が削られて、上から見ると海岸はみんなテトラポットになってしまった。上から見ますと、日本で一番足りないのは何かといたら、多分自然の海岸と土だ。子どもたちは土があったら、土だ、土だと喜んでいますが、そんな具合に固まってしまった、こういうことになるわけでありませう。

【今後の課題・ビッグバンと経済構造改革】

これをかみ砕きながら成長率をつけて、高めてやるには大変なことであります。そこで頼みの綱は、成長率を高めるためには新しい産業を起こすことだ。高付加価値産業の革新的な技術の産業を支える、ハイテク産業を支える、高度なサービス業を創る。高度なサービス業の中には金融業があります。金融業というのは非常に重要な産業で、先進工業国では金融業が発達し、そこで国の貯蓄が集まり、海外の貯蓄が集まり、それを中心として国ではもちろん、海外に資金が配分されることになります。そこで大量の人が雇われて、の結果、高齢化した人々といいますが、高齢化した弱まった人々が、そこで雇用機会がられます。さっき申し上げた海外に投資された、その収益によって人々が食っていける、利生活ができる、こういうことになるわけでありませう。

わが国は 1,200 兆円というアメリカに次ぐ巨大な貯蓄があります。現在の貯蓄率からしたら、まもなくアメリカを抜きそうだ。この 1,200 兆の貯蓄はあるけれども、多分本の金融機関がレベルが極めて劣っておりますから、海外に持っていかれてしまう。来月の 4 月になれば、まずビッグバンの第 1 番目として為替の自由化が始まります。その時、本の方は、外国に円預金も、ドル預金もできるようになりますから、ごく簡単に言えば、ロンドン市場で円預金をします。その金利が高い。そこで、ロンドンに注文して、それによって日本の株を買えば、株式売買手数料は日本の 3 分の 1 か 4 分の 1 ですし、株式売買取引税はかからない。こういうことになりますと、どっと海外に資金が出ていくということになるわけでありませうし、日本の金融機関の競争力とか、周辺のファンダメンタルズらいつて海外にとられるかもしれない。このようなことで、黙っていれば、遅れば遅るほど競争力の格差が拡大するわけでありませうから、2001 年の間に一挙に自由化して外との競争にさらすというような思い切ったことがやられるという手はずになっているわけでありませう。早くやりますと 1,200 兆の巨大な貯蓄を持ちながら、世界的に見た、ごく三流の金融国になり、その貯蓄の運営は主として海外企業に任されるのかな、海の銀行に任されるのかなということで大変であります。

産業に関しても、アメリカの産業は非常にうまいことをやります。コンピュータ産業で、演算部分の MPU、一番の計算するところの半導体 IC とか、ウィンドウズというようなソフトは、アメリカの国内で開発して、部品は海外生産です。メモリーなんて確かに本はずばらしいんですけども、メモリーは、日本でも、韓国でも、台湾でも競争しな

がらあつと言う間にコストが下がって、その安いコストの製品を集めながら、アメリカでコンピュータを組み立てるとか、アメリカのMPUとか、ウィンドウズを高い値段で外国に売って、外国で組み立てていくというようなことで、ハイテクといえますか、付加価値率は高めていく。こういうことで、映画王国だったら、映画王国とコンピュータグラフィックのシステムと、基本的なソフトの強さをつくりまして、インターネットかなんかわかりませんが、それを全世界に供給しながら、そこでコストといえますか、付加価値をとっていき、このようなことをやっているわけです。当然のことながら、わが国の産業もレベルをどんどん高めなければいけないわけです。



【今後の課題・土地利用】

わが国は賃金が高いだけではなくて、その上、土地の使い勝手が悪いと言われる。この間も日本を代表するようなメーカーのトップの方に会いまして、なぜそんなに海外に出て行くのだと聞くと、彼の答えは、日本の港も、船も使い勝手が悪いということです。つまり日本の港は24時間操業しておりませんし、日曜日は休んじゃう。PRですけども、日本の貿易港の中で24時間操業をやり、土日を休んでいないのは私の故郷の清水港です。あとは全部休んじゃうわけで、そうすれば、当然のことながらガントリークレーンなどの回転率が2分の1になり、コストが上がり、港には高速道路がついておりませんから、そこから運ぶ。そこで込んでいる自動車道路の上を運転している運転手さんの賃金は一番高いし、高速道路料金をとるのは世界的にも少ないわけで、ここで目が飛び出るほど高い料金をとられることになりますから、ちょうどこのミネラルウォーターでも、フランスから生産コストも引くくめて、横浜に持ってくる値段よりも、横浜から最初の小売店に持ってくる方がよっぽど高い。

飛行機でも、羽田や成田で枠を取るのは非常に大変です。台北とかシンガポールだったらいつでも枠を取れるそうですから、進歩が早い部品を輸出するには、台北やシンガポールを使わざるを得ないというように、トータルなシステムが具合が悪いので、日本の土地を利用するよりも、海外に行って海外の土地を利用し、海外のインフラを利用したほうが結局安い。

いってみれば、日本のインフラ不足といえますか、土地不足といえますか、土地の高さといえますか、いろいろな因縁といえますか、2000年来重なった因縁から逃げ出すためには海外に行ったほうが得なんだと、このようなことになるわけでありませう。

[今後の課題・教育]

海外が成長し、そこでコストが安いものを作られるようになったら、わが国としてはアメリカのように先端技術さえ栄えれば、あるいは先端の金融機関とか、そういう技術さえ栄えれば、それでバランスがとれることになります。

そのためにはどうしたらいいかということになりますと、どうも教育改革らしいということになります。でも、教育改革も極めて難しい問題があるという感じがするわけであり、よく存じませんが、小学校も中学校も決まった学校に行き、決まったものを習っているから安心でありますけれども、ちょうどアメリカのように、適齢期になったら小学校が四つあって、A小学校は数学が得意なものを伸ばす。B小学校は万遍なく教える。C小学校は情操教育をやって詩や音楽を教えてくれる。D小学校は体操に力を入れてくれる。あなたのお子さんはどれがお好きで選ばれますかというような一種の多様な中から自己責任を負って選択する、どうしても気に入らなければ親御さんがご自分で教育を与えてください。年に1遍か、3年に1遍ぐらい試験を受けてくれれば、それで結構です。このような多様な中からクリエイティブな人々が出ていくはずでありますけれども、わが国はそんなことをやったら不安でしょうがないから全部一緒にやっていくわけであり、

余談ですけれども、例えば平等社会を作るために地方に公共投資をばらまいたということと全く同じように、小学校でも給食で同じものを食べておりますし、このごろは、平等社会のために運動会も駆けっこをやめてしまったんだそうです。駆けっこをやると負けた子が気の毒だから、運動会はやめて遊戯だということで踊ったりしているそうです。夏休みの絵日記もやめてしまうのだそうです。このごろハワイに行ってくる人が多くて、子どもがハワイのことを書いたら行かない人が気の毒だ。だから絵日記はやめた。本当に涙ぐましいほどの平等で、それに任せると、われわれは安心して居るわけで、日本人はみんな同じ顔をしている。日本人に表情、顔がないというのは当然であります。不平等にならないように教育して、その結果、安心して住んでおられるわけであり、新しいクリエイティブな人を創っていくというのも、極めて難しい問題だということです。しかしそうならないと困る、このようなことで果敢な挑戦が始まっているということになります。教育でも、選択はある程度できるようになってくるということでもあります。

[今後の課題・コミュニティづくり]

それから、将来を考えますと、差し当たって、老人の住めるコストをできるだけ安くしたほうがいいと思われ、日本はコミュニティが崩壊しつつあると言われますが、欧米、特にヨーロッパなんかはそうであり、だんだん中心地に自動車を入れないようにしています。まちの中心は自転車やトロリーバスで行き交い、真ん中の広場には木が植っていて、落葉樹で、夏は日影になったり、冬は葉っぱが散ったりして、そこでおじいさん、おばあさん、多くの人々が座って、ドイツやスイスだったら、そこにテラスハウスやカフェがあって、何となくコミュニティの中心でブラブラできる場所があります。日本もこのようなことを実現すべきだと思われ、

そうなりますと、老人が歩ける所ができて、コミュニティに助けられ、安全な社会ができて上がるかもしれない。目配りができた社会だというふうに思われます。塀も低くしなければならぬだろう。残念ながら東京郊外なんかは、塀がさらに高くなっちゃった。本来だったら、昔の田舎とか、欧米の住宅地のように塀が低くて、自分の庭の延長上に歩道があって、そこの並木は自分の家の木のような感じがして、そこでカレッジかなんかは共通の広場であって、みんなが使う。ですけれども、日本の場合は、残念ながら、みんな塀が高くて、家が狭いせいもありますけれども、隣に見えないようにして、そして外を誰が歩いているか知らなくて、コミュニティの人々の顔も知らない。小学校や中学校は児童、生徒以外は立入り禁止で、塀が高くて扉も重々しい。これを何とか直さないと安全な世界というか、老人が安心して歩けるような世の中にならないだろう。

阪神・淡路大震災でも、淡路島の北淡町の死者は非常に少なかった。竹内さんというのがいて、昨日はどこにも行っていないはずだ。出張もしていないはずだ。飛び出てこないぞ。竹内さん一家はこの下にいるぞと。おじちゃんはこの辺に寝ていて、おばあちゃんはこの辺に寝ていて、近所の人には寝ている場所も知っていますから、掘り起こせば、すぐ助け出せる。大都会でグシャッといったら、誰が住んでいるかわかりませんし、昨日いたかどうかかわかりませんからそのままでございます。老人が多い社会になったら、安全といえますか、まちのたたずまいといえますか、感じも変えていかなければいけないと思います。

[今後の課題・文化、規制、地方化と公共財]

それから、経済も老人だらけになると活力がなくなる。ハイテク産業や金融業で活力を維持していくためには、海外の人々の力を利用しなければならないことになるわけです。現在もありがたいことには、東京は世界最大の観光地で、文化都市でありますから、人々が集まってきてくれる。この力をこれからもずっと維持していかなければならないと思われれます。東京は文化が高いといっても首都圏には 3,000 万人の人がいて、その中でクラシックが好きだという人が 1%いたとしても 30 万人いますから、それで採算にのる。極めてユニークなものでも、採算がのるわけです。これで世界最高のレベルがあって、ここで押し合いへし合い住んでいながら、文化性の極めて高いものができ上がっていくというふうに思われます。

これまで投資したものが数十年したら、代替投資が起きなくなるほどの、日本経済はそれだけ公共事業でメンテナンスが十分できなくなるぐらい成長率が鈍化していけば、当然そうなるわけです。ですから、そうなった時には、どこの地域でも、東京でも、もっとわかりやすい文化性が必要だと思われれます。

わかりやすい文化性というのは、とりも直さず、住宅も公共財だ。住宅の外観は公共財だと、中身は勝手でありますから、庭も塀も公共財だということで公共財として全体に規制するということが極めて重要になります。

規制の結果、そこから文化性といえますか、欧米のような落ち着きのある、それこそどういうものができていくかというのが、まさに国際競争力になると思われれます。

そのためには、できるだけ地方分散を進めてやって、地方に権限を任せる。中央は消費税ぐらいでがまんして、所得税とか税をとる権限も、地方自治体にすべて任せてやる。

その自治体の政策によって工業化とか、あるいは住宅地とか、まちの姿をすこぶるきれいにしてやって、そこでいろんな人々がやって来て、生産活動をやり、あるいは知的活動が活発になれば、地価が上がり、評価が上がり、それによって収入が増え、そこに住んでいる方たちは資産が増え、そこで老人になった時には、増えた資産を売却して、別途郊外に住み替えられるということになりますと、極めてうまい形の循環が行われるんじゃないかなというふうに思われるわけです。

ですから、これからは土地の上に立っているものは公共財だ、すべて外観も公共財だというような考え方が広がっていかねばいけないという感じがします。

平たく言えば、これからの危ない経済といいますか、行き詰まった経済の中で活力を維持していくためには、いままでのような官主導のシステムを変えて、市場経済を大幅に導入していくということになりますけれども、その中で公共財の範囲だけ拡大し、一般的に規制を強化をしながら、個別のことについて市場に任せるということになります。

それから、政府の仕組みでいえば、統治システムを変えて、できるだけ地方に任せる。国を中央で統治するコストは、成熟社会になりますと極めて高くなり、かえって無駄なものが増えます。シビルミニマムが十分完成した時には無駄なものが増えますので、その味でも統治システムを変えることが、これから要請されてくると思われま

【今後の課題・国際化と土地】

これからはわが国に先端的なものを集めて、海外で生産技術を開発し、できるならば海の頭脳を日本に集めるというわけでありま

ただその中で問題の一つは、外国の人がこれから土地を持つだろう、その土地を外国にの程度勝手にしてもらっていいのかという問題があります。私は故郷の静岡総合研究所理事長をやっており、清水市のことも考えておりますけれども、東京から進出した企業多くは確かに過去は役に立ちましたけれども、工場活動がなくなっても、土地がそのまま残っていて、そして、地元のことはお考えにならなくて、本社中心に動いておられるわけです。そのように、土地利用を全体的に考えますと、外国の方々の所有も増えるということになった場合、長期の定期借地といいますか、100年とか、500年の借地中心の体に変えていくことが重要と思われま

長い将来は誰が貸し手になるかといえば、結局、家が貸し手になって、そしてわれわれは長期に借りて借地権を売買する、全体としての立っているものも公共財であるというような機能を高めないといけないと考えるわけ

もう一つの問題は、土地の上に載っている建物には公共財としての機能がありますけれども、そこに住んでいる人々の中身の有効利用です。日本は劇場がいっぱいできましたけれども、中身がないからソフトが足りない、稼働率が低いというのも重要な問題です。

もう一つは人の生活です。私事で恐縮ですがけれども、私は清水市の三男に生まれて、東

京に職を求めて、東京郊外に核家族を作って住んで、清水との地縁的な関係も薄れ、血縁的な関係も薄れ、帰属する先はありませんから、身も心も長銀に捧げたわけです。いよいよ私が年になって、長銀からおまえはそろそろ出ていけということになって、ふと気がついてみたらコミュニティがなかった、こういうことでもあります。女房は周りに友だちを作ってますけれども、亭主は気がついてみたら、帰ったら女房しかいない、濡れ落葉になるわけです。女房に死なれたら大変だ。全く天涯孤独になるわけです。隣とも塀は高いし、だんだんぼけていくのかなという感じがするわけです。

ですから、一方はハイテクで活躍する人もいるけれども、一方には、地べたに張りついて、そこで共同体を作り、そこで塀も低く、学校も共同利用しながら、一生そこで住んでいて、職住近接といいますか、そのような基盤を作っていかなければいけないという感じがします。

われわれは、浮いた社会で動いてみましたが、結局さびしくて、私もそうですけれども、晩年になったら、しまったと思っているわけです。これから続々団塊の世代の人が「しまった、しまった」という声があふれるに違いないと思われます。その上に、市場経済が導入されるわけですが、市場経済というのは極めて冷たいものです。新古典学派がそうですけれども、個人も、企業も利益を求めて勝手放題をした時に、パレート最適が得られる。最高のものが得られるというわけです。勝手放題したらうまくいく。例えば個人も株のことばかり考えて、もうかれぱどんどんいく。企業は従業員優先なんかやめて、利益率中心で株価の維持だけを考えていく。これが一番重要なことだ。従業員は、会社から冷たくされちゃうから、いつやめてもいいぞと勝手な行動を起こしながら、株なんか考えながら勝手に個人で行動をとる。このように非常に冷たい社会、この時にパレート最適が得られるというのが新古典派の経済学で、多くの人々がこれを支持し、これが市場経済導入の根拠になっているわけです。

それには強烈な自己責任があります。規律がありますし、自己規制があるわけですが、われわれはそういうことには全くなれていない。千年来徳治システム、徳治政治が行われ、個人ではなくて、みんな群れをなして、村落共同体で生活していたのです。ですから、自立なんてしたことはなく、日本は成人になっても、堂々として親のすねをかじりながら自立なんて言っている。しかも、自己責任といたってたった1人の責任なんて無理であって、いろんな事件があっても、お役所のほうもなかなか責任者が出てこないわけでありまして、われわれも責任なんて余り考えないで行動をとっております。大体自己というのが欧米のようにない。

がんの宣告だって、欧米では「竹内さん、あんたは死んじゃいます。1年先ですよ。奥さんに言いましょうか」というそうです。私は考えて、1年かと、いま言ったんじゃ、1年で死んじゃう人の介護をするのは女房は張り合いがないだろう。半年生きるという望みで介護をしてもらって、半年経って言って、また半年で死んじゃうなら介護をしよう。半年先に言うのが、私の人生の最後の女房から受けるサービスの極大値は半年先だ。私にとっては自立的な判断があるはずだ。こう思うわけですが、日本では必ず奥さんに言っ

て、ご主人に言いましようかということですから、どうも自己責任の根本が変わっているらしい。

この中に欧米のシステムが入ってくるわけです。競争こそ最高だということですがけれども、われわれは競争は過去やっていないわけです。欧米はずっと昔から、マルクスでも、ヘーゲルでも、あるいはアダムスミスでも、ダーウィンでも競争です。文章的な競争でも、階級対立でも何でもいいけれども、その中で競争すると国が富むとか、人類が進歩するとか、神がやってくるとか、競争して努力した結果救済されると。

わが国はそうなってませんで、仏さんも、神さんも、その辺にいっぱいおまして、そして、死ぬと西方浄土に行って、悪い人はまた戻ってきて虫かなんかになって、仏さんが宿っているわけです。じっとしてお互いに共存する。じっとしていれば、仏の原理を悟れば解脱する。われわれは救済じゃなくて解脱であり、努力しないでじっと考えている。禅なんかそれであります。

そのような静かなシステムで生きていたのに、努力する中で救済されるというような、われわれからみれば、激しいシステムが突然入ってきた。夏目漱石の言葉を借りれば、本に嫌な時代になった。競争、競争というような時代になった。この中で内省的になれるめには、神経衰弱にならない程度に生活するがいいということで、ちょうど『それから』大介も高等遊民でみんなボヤツとした人ばかりだ。真面目に生きた芥川とか、有島一郎最後に死ななければならなかったということでもあります。

それから、戦後も、年功序列から終身雇用であるとか、徳治システム、つまり役所が全押さえて、全体のレベルを上げて、教育を上げて、人工的な社会を作り、その中で徳の人が治めるというような儒教そのもののシステムを残してきたのですがけれども、現在それがどうもうまくいかなくなり、残念ながら、人々が政府にたかることが恥ずかしいことではなくて、これは正しい主張だったというふうに思われてきてしまったのであります。東京では、強者が弱者のふりをして、ごちゃごちゃしてしまっ、土地についても共同用ではなく、土地所有権が圧倒的に強くて、私権が悪い意味でますます強くなってしま、システムに行き詰まりとか、心の行き詰まりとか、これはどうにもいかぬということになっています。

昭和の初めには、革新官僚と軍部がいろんなことをやりました。地主よりも借地人の権が強いとか、家主よりも借家人の権利が強いとか、弱者救済のシステムをつくり上げた。後もそれが残りましたけれども、それが変な具合に、強者が弱者のふりをして既得権を維持する。ごちゃごちゃに変わって、うまくいかなくなりました。

ですから、やむなく市場経済の導入ということですがけれども、市場経済の導入というのは、ある意味では自己責任が重要ですし、神の前における絶対的な独立者個人などわれわれは思っていないわけですがけれども、それを前提とした競争原理が本当に原理になる。新しい原理になる社会に移りつつあるという感じです。できれば、その限度が非常に軽く、しかも、豊かな美しいまちづくりという公共財が地面の上ののっかり、その中身は種の共同体的なアイデンティティであることが望ましい。アメリカでも転勤したら嫌だ

とって転勤を拒否する人もいれば、転々としていい職を求めて転勤していくエリートもいます。エリートになったら、すぐホームパーティをやって、そこで共同体を作るような努力をしているということです。われわれは後者については全くなれていないわけですから、郊外でしょんぼりしているのかなということでもあります。うまいぐあいにのっけてやるという努力はこれから必要であります。

そういう意味でいきますと、これからの十数年か 20 年ぐらいの間に土地利用システムを含め、どのようなうまい社会的システムをつくり上げるかということが問われている。欧米的な心が激しくなるようなことではないシステムができないかなと考えています。

現在、歴史ブームです。歴史家の中にはアジア中心の考え方があります。これは、16 世紀までアジアは素晴らしかった、たった 300 年間の欧米がいけなかったんだとか、あるいは欧米が作った近代国家観、国債を発行して軍備を拡大してというような近代国家という考え方を作ったことこそ、19 世紀から 20 世紀の悲惨な世の中を作ったんだ。わが方はそういうことはずっとなかったんだという考え方がある。わが方は田んぼを耕して、10 世紀から 16 世紀まで人口が 3 倍に増えても、マルサスの原理は克服してきた。向こうの連中は牧場を増やすだけで、楽をしてやろうということで自動化設備、近代的な工場を作って、ここで地球環境と衝突することになってしまった。わが方はちゃんとしたものが出てきているから、これをうまい具合に利用すべきだとか、いろんな考え方があります。

やはり欧米の近代的システムの素晴らしさと、アジアの素晴らしさとがちょうど対峙してきているという点も、これからの日本のシステムを考える時に、市場経済中心か、ちょっと変えたような経済か、美しい村落共同体を軸にした独特なものできないのか、あるいは日本らしい土地利用システムができないのかということがございまして、それがちょうど歴史上の大論争も現在展開されているのかなという感じがするわけであります。

はなはだまとまりませんが、以上、ご報告を申し上げます。どうもご静聴ありがとうございました。(拍手)